

駒澤大学2-1 国士舘大学

優勝の可能性は失ったものの、この日も駒大イレブンへの声援はいつもと変わらず大きく選手たちをサポートし続けた。
(撮影・野澤俊介)



前期のリベンジ成功 この勝利をきっかけにインカレ優勝へ

先を見据えた試合

関東大学サッカーリーグもいよいよ最終節を迎えた。前期の敗北によりすでに優勝の可能性が消え、リーグ3連覇は夢と散った駒大。選手たちのモチベーションには多少なりとも影響が出たはずである。しかし、いつまでも沈んでいる暇はない。来月には4年生にとって最後の戦いのインカレが控えている。そのため、今節は勝つことは勿論、内容的にもいい形で次に繋げたい。

前半、駒大が立ち上がりから怒涛の攻撃を見せる。両サイドバックが果敢に攻撃参加し、前線に人数を掛けることで次々とシュートチャンスを作り出した。しかし、ゴール前という所で決めきれず、逆に国士大にワンチャンスでカウンターの決められてしまう。先制は許したものの、この失点以降も優位に試合を進める駒大。だが、なかなかフィニッシュで終えることが出来ない。そんな膠着状態が続いていた37分、赤嶺の抜群のポストワークから中後がダイレクトで豪快にゴール右隅に突き刺し、同点に追いつく。

後半に入ってから、両校一進一退の攻防が続く。国士大の両センターバックはヘディングに強く、赤嶺、巻も手こずるシーンが見られた。その中でも、今回トップ下の位置に入った宮崎が公式戦初スタメンながら堂々のプレーを披露した。パス精度が高く、足元の技術もしっかりしており、随所にそのテクニシャンぶりを見せた。そして67分、中後が蹴ったCKを大澤が頭で合わせて逆転ゴールを上げる。その後この1点を守りきり勝利を取めた。この試合の結果により駒大は今期のリーグ戦を3位で終えた。

今期は上位チームと接戦の末、競り負ける試合が多々あっただけに、今節の勝ちに次は繋がる結果となった。だが、「まだまだ課題はたくさんある」と中嶋が語ったように、押している時間帯での決定力や前線からの積極的なプレスなど修正すべき点は山積みである。しかし、ここで何より大切な事は選手一人一人が持つ勝利へのひたむきな気持ち。前述した課題もチームとしてこの気持ちに共有することが出来れば、自ずと改善されるものである。おこりではなく、駒大イレブンにはそれが可能なはず。残り少ない期間でこれらをどう克服するかに懸かっている。4年生は最後の晴れ舞台を有終の美で飾るか。